



第1回有識者検討会における議論について

令和5年7月

農林水産省

大臣官房デジタル戦略グループ

第1回検討会における委員の主な御発言内容

委員名	発言内容
大橋委員	<ul style="list-style-type: none">・この間、様々なことが起き、基本法検証の議論においても、農業DXの重要性が改めて認識された。農業現場における生産性の底上げだけでなく、サプライチェーン全体をDXでつなぎ、農業を基盤としたフードシステムの質の向上を図ることも含意されたものと認識している。・バージョン1.0については、とりあえずDXができるような領域を項目として拾い上げ、できるものやっいていこうという姿勢で整理したが、2.0の目線ないし目標は、ユースケースを一つでも多く作っていくということではないか。進捗が遅いところに資源を投入し、各取組のペースを同じにするのではなく、できることを進めていくべき。・データ活用については、データはあくまでも手段であり、データを活用して農業を行っている農業者数ではなく、データ活用により新しくできるようになったこと、あるいは売り上げが伸びたなどの結果について目標を掲げる方がいいのではないか。・DX推進の方向性・意義を農業者・関連産業の皆様に実感してもらうことが重要であり、「食と農の風景2030」の世界観を実現する、DXをさらに加速することでこうした世界を一つでも多く作っていくということではないか。
下山委員	<ul style="list-style-type: none">・成功事例ばかりではなく、プロジェクトが計画通りにうまく行っていない、改善が必要な点、軌道修正をすべき点などについて要因分析を行い、失敗を繰り返さない、次の計画に活かすということが重要。・データの活用について、農水省による筆ポリゴンのデータなどが整備・公開されており、民間エンジニア等からも高く評価されている。・オープンデータについて、データカタログに登録されているものも含め、より活用しやすい形式にする等、改善点はまだあると認識しており、データマネジメントの取組の中で、データの生成から、内部活用、外部活用へとシームレスにつながるオープンデータ化の体制づくりを進めてもらいたい。

第1回検討会における委員の主な御発言内容

委員名	発言内容
宮島委員	<p>・この2年間で思った以上の人口減少が明らかになり、農業分野においても人手不足が顕著になった。世の中全体の意識も、DX構想策定時の夢を描く段階から、DXを進めなければ維持できない段階へと変わっているのではないかと。また、農業分野は一概に海外と比較できないが、他分野のDXの政策を見ていると、世の中が進むペースに比べ明らかに遅く、全体としてスピードを上げていかないと世界の潮流についていけない。</p> <p>・スマホがないと買い物ができなくなってきた等、世の中の実態が想定を超えてしまっている。高齢者を含む全体の押上げが必要。DXの取組が、一部のとがっている人たちだけでなく、ノーマルなものとなるようにしないといけない。現場の技術的なハードルはぐっと下がったので、「やってみると便利」を広げて、改善していくかたちでもいいのではないかと。</p> <p>・マイナンバーの取組は昨今のトラブルを受けて、取組にブレーキがかかってしまっている。マイナンバー制度においては当然重要な課題であるが、デジタル分野においては、大勢に影響が無い小さなトラブルをきっかけとした停滞が起こらないようにしたい。農業分野においては、多少のバグは許容して、前進すべき。</p>
中谷委員	<p>・現場では、スマート農機の導入などのデジタルライゼーションは進んでいると認識しており、便利な技術に関しては、自律的な導入が進んでいくのではないかと。</p> <p>・行政手続に関しても、eMAFFの整備・利用が進んでいるが、DXにつなげていくには、地図（マップ）と行政手続の2つが肝になると考えている。現場では、デジタル人材の不足とデータが共有されない問題があり、これを乗り越えないとDXは達成されない。行政的な手続に関しては、行政がインターベンション、先導してDX・デジタルライゼーションしないことにはDXは進んでいかないのではないかと。</p> <p>・また、データが共有され、集約されたときに、データの保護、共有するための共通化など、データマネジメントの議論も重要な点である。</p>

第1回検討会における委員の主な御発言内容

委員名	発言内容
加藤委員	<ul style="list-style-type: none">・農業DXを実現するためには、IT技術を活用して情報や価値をサイクルさせることで、農業者は食料を共有し、消費者はそれを消費するが、農業に思いをはせることはないという、分断されてきた生産と消費の間を、バリューサイクルでもう一度つなぎなおすことで、「安全・安心、環境負荷低減、多様な食材の供給、おいしい」が持続的につながっていく、ということではないか。・社会実装するためには、構想を政府が立てて、実装戦略については、政府・省庁が面倒を見るのではなく、民間が寄せ集まって、自分たちのビジネスが拡大し、社会もよくなるという目的を共有化して戦略を練るべきではないか。・農産物の広告宣伝費は全体の産業からみてごくわずかであり、PRの重要性が理解されていない。
岡林委員	<ul style="list-style-type: none">・この2年の現場の状況については、思っている以上に資材の高騰が厳しく、生産コストが上がっているが、販売単価は横ばいで、農家の所得が厳しい状況にある。高知県や九州各県などの遠隔産地はどうしても物流が必要であり、卸売市場販売は絶対に無くてはならない基幹流通となっているが、産地のJAから卸売流通のところ弱く、生産者不在、消費者不在の大量流通となってしまうので、バリューチェーンの実現について取り上げてもらいたい。・日本は98%が零細の農家であり、県としては農業法人だけでなく零細な農家も大事だと思っており、そういうところにもDXを入れていきたい。そのためにはデータ駆動型の普及指導・営農指導ができる指導員の育成が必要。・高知県ではSAWACHIというデータ連携基盤をやっており、WAGRIから市況データ、気象データを連携し、WAGRIを通じて生理生態エンジンを全国に広める計画もある。データ利活用に関しては、まだデータ駆動型のアプリケーション、製品、サービス開発に至っていない状況。農業分野ではいまだデータでビジネスを成り立たせるのは難しく、楽に楽しく稼げる農業はなかなか実現厳しい。行政でできるところは行政で取り組んでいきたいと考えており、ぜひ連携をしていきたい。

第1回検討会における委員の主な御発言内容

委員名	発言内容
荻野委員	<p>・この2年間での変化について、自治体の農業DX・スマート農業に取り組む動きが出てきて、生産者の意識も盛り上がってきていると実感している。eMAFFの数字もすっかり伸びていてすごいと思う反面、誰のDXかという問題意識がある。生産者のところでは、トランスフォーメーションがそこまで起きていない気がする。</p> <p>・この2年間で非常に感じるのは、農業とサステナビリティの関連がものすごく深くなってきたと思っている。みどりの食料システム戦略や環境の改善、カーボンクレジットとどうやって結び付けてやっていくのかが一つポイントになるのではないか。また、最終的に農業が魅力的になるためには、生産者が儲からないとしょうがない、消費者の価格への反映が大事、というところは皆さん同じと思うが、農業者のマーケティングに加え、消費者側の意識改革をどう盛り上げていくのかが課題。</p>
三輪座長	<p>・農業分野ではデジタルイゼーションの取組が進んでいて素晴らしいが、DXのカベは非常に高く、非連続である。eMAFFがスピーディにできたのは素晴らしいが、そのままDXが進んで、FaaSが実現する、ということではない。いい成果が出ているからこそ、カベを乗り越えるために、次の課題を率直に議論していきたい。</p> <p>・KPIを定量的に見て、できているところをしっかりPRしながら、できていないところをテコ入れしていく、あるいは、外部環境の変化等を受けて、必要に応じてKPIの再設定も進めていくということだろう。</p> <p>・官民のデマケはWAGRIの検討において議論されたが、農水省と各自治体のデマケについてはあまり議論されてきていなかった。国と自治体の有機的な連携が必要であり、その方針について、DX構想で大きなディレクションを示すことができればよいと思う。また、自治体にどう農業DXを進めていただければいいのかということを検討いただければと思う。</p>